

# 介護老人保健施設しおん

症 例 概 要 利用者氏名：M・H様(女性.90代・要介護4)  
利用期間：R1年8月中旬～在籍中

経過：H30年10月に自宅トイレへ戻る際に転倒。左大腿骨骨折の診断を受ける。11月に回復期リハビリテーション病棟においてリハビリ開始するも発熱や倦怠感の訴え等によりリハビリが進まず体調不良改善のため褥瘡・尿閉の治療を進める。R1年7月、褥瘡治癒となりカテーテル留置によって尿量も確保されている。

## 内 容

入所時ご家族の希望は、「寝ている時間を減らし日中車椅子に乗車して過ごす時間を増やしてほしい」ということであり、ご家族の中で自宅復帰は考えていない様子であった。

介入当初、廃用症候群により身体機能低下が進み基本動作が全介助レベルであったことから、リクライニング車椅子で離床を開始した。日中は昼食時のみ離床し、それ以外の時間はベッド上で過ごすことが多く、常に介護士に「早く寝かせて下さい」「ここで食べたい(ベッド上)」「起きたくない」と離床を拒否し、リハビリに対しても「動きたくない」「やりたくない」と消極的であった為、ベッド上でストレッチや筋力訓練から開始し、徐々に運動の負荷量を増やしベッド上で端座位訓練や車椅子への移乗訓練を行った。入所から3ヵ月程度経ち少しずつ離床する時間が延び、車椅子に座っているご本人をご家族が目する機会が増すことで、ご家族が喜ばれたのと共に、入所当時は考えていなかったHさんの自宅復帰への希望も聞かれるようになった。そんな時、ご家族より「Hが車椅子で乗車して日中過ごせるのであれば自宅復帰を考えたい」と提案があり、それをご本人に伝えると、更にリハビリに対しての意欲が上がり、これまで消極的だった立位訓練や移乗動作訓練も積極的に行うようになっていった。加えて、ご家族は毎日(コロナにより面会禁止になるまで)面会に来ており、訓練を行う際も一緒にリハビリ室に来てエールを送ってくれたことで、Hさんは笑みを浮かべることが多くなり、「私もっと頑張ります」とさらに意欲が高まった様子が見受けられるようになった。その後立ち上がり動作や端座位保持能力が向上してきたため普通型車椅子での離床に変更し、毎食拒否なく離床出来るようになった。朝食後には他利用者さんと一緒にラジオ体操を日課にしていることや夕食を摂りながら大好きな相撲を見るなど、QOLも向上した。

入所から1年、現在は通常の訓練に加え、11月の自宅復帰に向けて、Hさんご家族中心に多職種協働により、介助動作指導等を行っております。寝たきりで入所し、自宅復帰のイメージすらない状態から、身体能力の向上に伴い、ご家族、他スタッフとの協働作業により自宅復帰に繋がる取り組みは、Hさんの日々の励みとなっております。Hさんの現在は自宅復帰に向けてまさにキラキラと輝いており、キラキラ介護賞に推薦致します。